

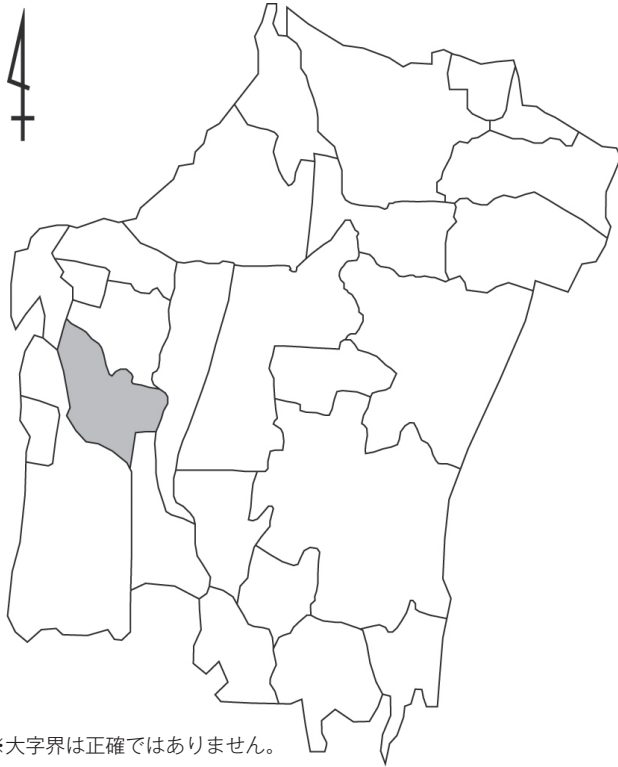
# 郷土かみのかわの歴史・文化財

## 上三川の地域と歴史 大山

大山は、町域の北西部、田川右岸の台地上に位置しています。北側は下神主、西側は鞘堂と多功、東側は川中子と梁とその境を接しています。田川は地区の東側を南流しています。北側と南側には、田川低地からの浸食谷が入り込んで田園地帯を形作っています。

近世の初めは宇都宮藩領で、『慶安郷帳』に大山村と記されています。天保年間(1830〜1844)の家数は26戸で、石橋宿の助郷役を課されていました。

さて、『慶安郷帳』にある大山村の範囲は、現在の大字大山とは違っていた可能性があります。天長元年(824)



※大字界は正確ではありません。

の『薬師寺戒壇縁起』には「薬師寺は大山郷にあり」と記され、江戸時代後期の『日光山勝道上人絵巻縁起』には「下野国大山庄薬師寺」と記されています。このことから、現在の大山地区から下野薬師寺にかけての一带を大山郷(大山庄)と呼んでいたことが分かります。

では、この「大山」という地名は、どのように付けられたのでしょうか。大山には、古墳時代中期から後期にかけての大小40基近い古墳からなる群集墳が残されています。中には全長50mにもなる前方後円墳もあります。この古墳群から大山という名称が付いたともいわれています。

この古墳群の中のひとつである五社神社古墳の上には、地区の鎮守・五社神社が鎮座しています。天平19年(747)の創建で、古くは五所神社または五土の神と称されました。宝治2年(1248)、多功城を築いた多功宗朝が当社を守護神としました。その後、正和2年(1313)に天照大神・火

産霊神などを合祀し、五社神社と呼ばれるようになりました。

ちょうど同じ頃の正安3年(1301)、字前畑に浄光寺という天台宗の寺院が建立されました。当初は華嚴宗でしたが、後に真言宗・時宗と改宗し、寛永年間(1624〜1644)に天台宗になりました。本尊である阿彌陀三尊のほか、薬師如来・十二神将が安置されています。毎年、護摩供養にて火渡りの儀式も執り行っています。

浄光寺には、正和2年と同3年の板碑が残されており、町の指定文化財になっています。板碑とは、緑泥片岩の一枚岩に文字を刻んだ供養塔のことです。浄光寺の板碑は、約180cmもある大型のもので、薬研彫りで「南無阿彌陀仏」と刻まれており、鎌倉時代末期の板碑の特徴をよく表しています。

寒さが厳しくなってきた今日この頃ですが、多くの歴史が残る大山を散策してみるのも、よいかもしれませんね。



浄光寺境内にある板碑